

映画や演劇、美術や音楽が溢れるこの街で  
私はもう一度誰かと出会い直す。

# のきした journal

vol.3

All human beings free from fear and want,  
and enjoy freedom of expression, speech and belief.

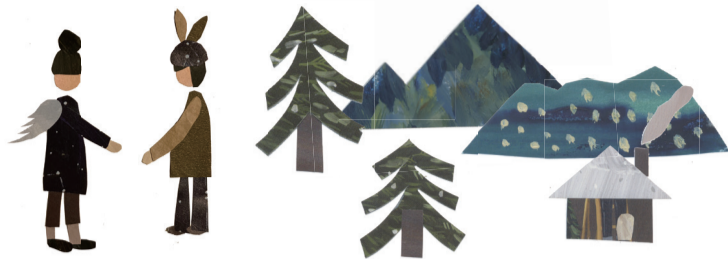


のきしたに関わるメンバーの声、のきしたに集まるみんなの言葉。  
世界が見過ごしてしまいそうな、この日常の景色を世の中に届けたくて。  
みんなの表現の場「のきしたジャーナル」第3号。  
今回のキーワードは「物語」です。

2023.NOV / TAKE FREE

発行：のきした

# あなたの物語を聞かせてください。



演劇や映画で披露される“作品”と、現実で起きている“事象”の境目がいよいよわからなくなってきました。それは「やどかりハウス」や「うえだ子どもシネマクラブ」がはじまったからなのか。いつのまにか地域にあるふたつの劇場で、日常的に語られるようになったみんなの“お悩み相談”の数々。それはとても個人的なものなのかもしれないけれど、きっとその意味だけではなく、社会の構造に置き換えられて語られるものたちでもあるのではないかと、次第にそんな風に思えてきました。自分の中だけで“悩み”を抱えるのではなく、社会と共有していくことで、また違う捉え方ができるのではないかと…。キーワードは「物語」。

今回は「聞き手」が進行役になり、「話し手」が自身の生い立ちや現在までを語り、「書き手」がひとつの物語として書き起こすという複数人インタビューを3チームで決行しました。立場は時に変わっていくこともあったようですが、個人から吐き出すように語られるストーリーを、ひとつの「物語」として記録してみました。

はじまりもおわりもない、いまも続く3つの「物語」を、ぜひお読みください。

## vol1: 癒えない傷痕

話し手 ねこ  
書き手 サワタリホ  
聞き手 元島生



恐怖が波のように押し寄せる。固い床の上で、喉が塞がれる。私は床に突っ伏し涙と鼻水の海に溺れている。呼吸ができない!! 誰か私を助けて!! 終わらない恐怖、孤独、聞こえるのはあざける声、冷淡な視線。曖昧な記憶の断片が、彼女の話から想起され、気づけば涙を流していた。

11月10日、ねこさんの家を訪ねる。車の中で、事情を聞いた時に想像していたのとは違う、ごく普通のひとが迎え入れてくれた。対面し、互いに自己紹介を済ませ、ねこさんが話を始める。常に恐怖に苛まれ、休まらぬ心を抱え、生きてきた人生の話を。孤独な子ども時代、解離していた20代、PTSD、結婚してからの過酷な生活、干渉する夫、癩癩もちの自閉症の息子、先端恐怖、音への過度の過敏さ…、ごく普通に見える彼女は、内面では、常に緊張し、恐怖に苛まれていた。想像がつくだろうか、家の中で人とすれ違うだけで、悲鳴をあげてしまうような恐怖が。車のエンジンをかけるたび爆発するのではないかと怯えるような恐怖が。

ねこさんは、今までの問題は子どもの問題ではなく自分のトラウマやPTSDが原因だと語った。子どもが幸せにしているのが許せず、八つ当たりをしてしまう。過度の恐怖から、子どもにナイフを突きつけてしまう。彼女の語る怒りには、自分にも重なる部分があった。かつて私自身も、包丁を握りしめ、怒りに震え家族を刺そうと葛藤していた記憶があったからだ。住居を変え、教会に通うようになり、息子の状態がとても良くなった。聖書を自ら読むようにまでなった。アフォーメーションやヨガを始め、常に苦しかった呼吸が緩められてきた。去年まで、消えてなくなりたいと思っていたのが、いまは、やり残し

たことがあると思うようになった。家庭から出られない子どもがひとりでメンタルを整えるシステムを作りたいと、未来の展望を語るねこさんの姿は、まっすぐで、とても眩しいものだった。

最後に私自身のかつての幼少期の記憶、過呼吸になり床の上でもがき苦しんでいる私を冷淡な目で眺める母の話をしたときに当時の苦しみを思い出し泣いてしまった。ねこさんは、どんな傷でも傷は傷だからと言ってくれた。去り際に私を抱きしめてくれた手と、掛けてくれた言葉はどこまでも優しく、彼女が歩んできた過酷な道のりと、それを耐え抜いてきた魂の強さを感じさせ、号泣してしまった。取材が終わったあと、わたしは、しばらく辛い記憶のフラッシュバックに苦しんだ。わたしが今回のインタビューを通じて感じたのは、他者の内面的な心というものに対して、いかに人間は無関心になれるかということだ。残酷な無神経さは私たちの心を踏みにじる。子どもが遊び半分に虫を殺し、動かなくなったその死骸を無関心に投げ捨てるように私たちのこころは無惨に扱われてきたのだ。どうかこれを読んでいる人には、周りの人たちを大切にしたいと思う。そして、こころについて知って欲しい。こころというものがいかに容易く傷つくのか、その傷がその後の人生にどんな影響を及ぼすのか、本でもネットでもいい。トラウマというものについて、少しでも知ってください。それが、他者と、あなた自身の傷に気がつき、癒すきっかけになるかも知れないから。

### サワタリホ

普段はスーパーのアルバイトをしています。家にいると不安から過食嘔吐をしてしまうため、やどかりハウスや犀の角のカフェをよく利用しています。話を聞いてもらったり、色々な人の話を聞いたりして、いつもこの場所の存在に救われています



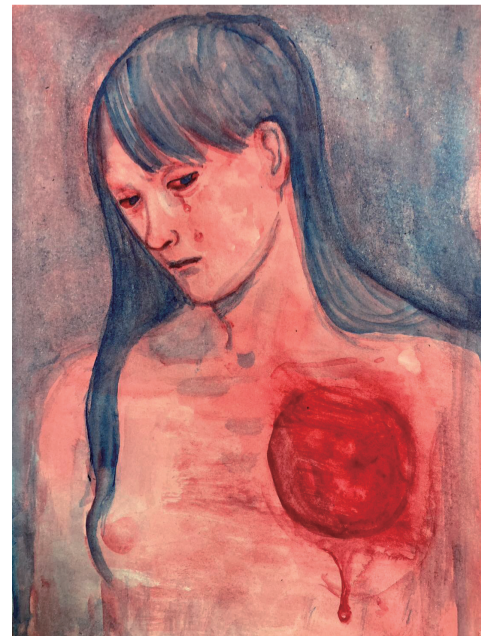
### つづきの話 |

物語を読んだねこさんから、こちらの詩が届きましたのでご紹介します。

## A WAVE

The people who need your help are often too tired to ask for it.  
Offer it anyway.  
Drowning doesn't always look like drowning

あなたの助けを必要としている人たちは、たいてい疲れていて助けを求めようとしない。  
とにかく提供することだ。  
溺れているものがいつも溺れているように見えるとは限らないから。



絵: サワタリホ

# vol2 : 彼女

話し手 亀井  
書き手 ともね  
聞き手 直井恵

彼女はいつもハイヒールを履いて凛として歩いてくる  
ハイヒールをカツン、カツン、と鳴らして

私はその音で今日も彼女が来たかと心が踊る  
香水のふわっとした香りが彼女の笑顔にとっても似合う

ある日のいつもより少し静かな午後  
私は初めて彼女の幼少期の話を聞いた

昔から母との関係がうまくいかず  
娯楽や勉強も抑圧されてきたそう  
なぜ私なんかと、と周りとの距離感も掴めず  
趣味も勉強も受け入れてもらえず孤独だった

自分の中の愛が薄い

自己受容は儂く消えていく  
自分の事は本当に好き、  
だが人に何か言われた時に揺らいでしまう

それでも気持ちが安定してきたと言う彼女  
色々な人と関わった事で学べた  
良いことも悪いことも  
気づきがあった  
自分の好きな事や苦手な事  
もう一度深く知り自分を大切にする

彼女が他の人の考えに耳を傾け  
色々な人に出会い色々な考えを聞き  
取捨選択し  
彼女の大切な人達の考え方が  
彼女の一部になり  
彼女を安定させていく  
周りとの距離感を探りながらも繋がりは続く  
そうやって少しずつ彼女の中に愛が染み込んでいく

愛が少しずつ濃くなっていく

母とは一緒にいたくない、それでも都会では生きられないと  
都会から1人でやってきた彼女  
知らない土地に来るといのはどれほど勇気がいることだろう

寒さが苦手な精神的に影響が出てしまうとっていた彼女がそれでも今年もこの土地で過ごそうとしてくれている事が妙に嬉しい

彼女が誰かに抑圧されず好きな事をしてほしいと心から願う

今日もハイヒールを鳴らし彼女は仕事に行く  
夜に消えてく彼女はとても綺麗だ

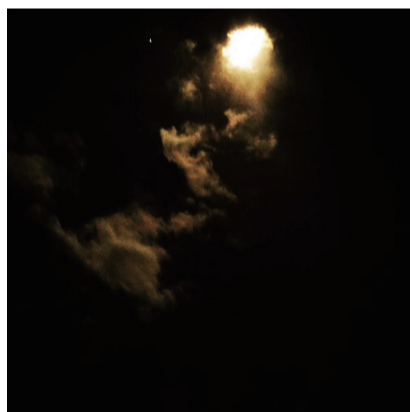
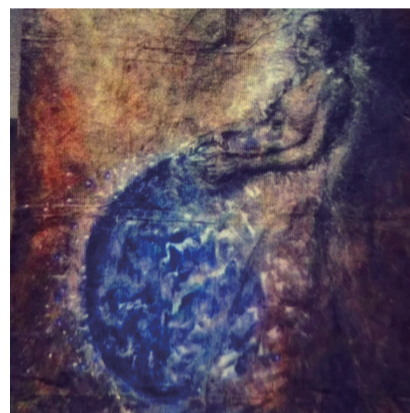
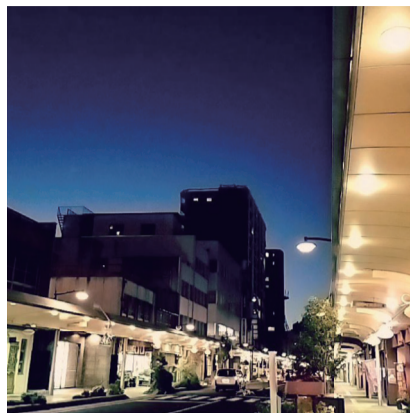


photo: やどかりハウス instagram より

## vol3 : 2人の話を、犀の角で、4人で大きく

話し手：ケー、どもりん  
書き手：みずほ  
聞き手：みずほ、くれは

2023年11月13日(月)の午後、犀の角に集合。話し手は、のきしたをきっかけに出会ったどもりんとケー。聞き手は、くれはとみずほ。つい先日もここ、犀の角での食事会で顔を合わせている。約束の時間少し前、裏口から中に入るとソファに深く沈むケー。ちょうど、くれはもやってきて、蒸したカボチャとサツマイモを出してくれる。どもりんの育てた野菜たち、色あざやか。食べながらどもりんを待つ。どもりん到着する。野菜の感想を伝えながら、じゃあはじめますかと、のきしたに出会ったときの話を聞いていく。

ケーは、のきしたでの食事会に参加したことで家族以外の人と話せたことがよかったと振り返る。

**ケー** : 今まで自分の障害と付き合ってきた中で、自分の主観と家族の第二者的な目線しかなかったから、それ以外の他人という第三者の視点でそういうのをしゃべれたっていうのは、すごくいい経験だったと思う。掴みどころがなかったんですよ、障害っていうものに対して。それが、他の人の話を聞いているうちに奥行きが出てきたっていうか。そういう薄っぺらかったのが、すごく奥行きをもって見れるようになったんで。だべってるのといっしょくたにそういう障害的な話もライトに出てくるみたいな。そういう感覚って始めてだったので。障害のこと話すと精神科医の人と一対一で、これこれこうでって、そういう話しかしてこなかったから。ライトにしゃべって情報交換できたっていうのが、すごい印象に残ってる。

"家族"という関係性や、自身の内面で生じる葛藤についての話が出てくる。

**ケー** : すごい細かい1本だけでもそれでも関係性は続いてくので、そうなるが好き嫌いだけじゃ終われないじゃないですか関係性が。自分は生まれてきたからの今までの蓄積があるから、なおのこと。だからどう、折り合いをつけてくのかなあっていうのを、それが何十年かかるのかなあか思いながら。ほんとに嫌いだったとき死んでほしいと思ったこともあったけど…。いざこの人たちが死んだときに自分でどういう感情に至るんだろうかっていうのがすごく不思議というか、わからないなあ、未知数すぎる。…家族ってなったときに、すごい複雑だなあって。

**どもりん** : (家族に対して)情みたいのがあって。死んだことを想像すると多分悲しくなると思う。なんだかんだ。…アニメでさ、人間を食べるバケモノがいて。そのバケモノを倒す捜査官がいて、その捜査官のある1人が親がいなくて養子としてそのバケモノに育てられて。…その最後が印象的で、残ってて。それでも俺の父親だって言いながら、泣きながら倒したっていうのが。ちょっと自分と重なったっていうか。…前にさ、父親が実家の近所の人とケンかっぽくなって。軽く暴行されたって言って、首しめられたって聞いて。それ聞いて、その首締めた人に対してちょっとカッとなって。情あるんだなって思って。その数ヶ月前に父親ポコポコに殴ってるのに(笑)。

**みずほ** : 俺の親父になにやってんだ、みたいな?

**どもりん** : 親父を殴っていいのは、僕だけだ。

**みずほ** : へー!なるほどー!

**どもりん** : 完全に100%嫌いになれない自分に嫌気っていうか、恥ずかしさっていうか。

**くれは** : なかなかのことしたもんね、お父さんにね(笑)。それは自分しかやっちゃいけないんだね。はじめて聞いた、お父さんへのそういう気持ち。…複雑だな……。

**ケー** : でも、それを抱えて生きてくって凄まじく無理なことなので、多分しゃべらないとやってらんないんだろうなって。自分1人じゃ荷が重いので、その重さを他人にもちょっとだけお裾分けっていうか。掴みどころのない重さ。自分1人で持たなきゃいけないから、家族だけしか関係がなかったときは。だから、最近ここに来て、こういう話になって、話す機会があって、話せるようになったから。ちょっとただけけど、重さがマシになったっていうか。そんな感覚がある。

1時間のインタビューが終わって、今回のテーマは家族だったねと4人で笑い合う。今回聞いた話はケーとどもりんの話ではあったけれど、“家族”である両親がいるわたしの話でもあり、わたしもそう思ったときがあったしまだあるかもしれないなあと自分のなかの言葉をさがす。

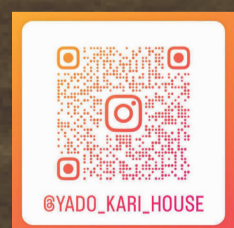
こういう話になるとは思わなかったから恥ずかしい、という感想のケーと、まだ話すことありそうなどもりん。

ホームであるはずの場所で苦しかったその人が、ほかの誰かと出会い、そして自分のなかのものにやもにやぐちやぐちやぐるぐるが話せてよかったなあと安堵した。話せることでほんのわずかでも、ほどける瞬間があることを“知っている”。またいつでもからまるから。また話したいね、と4人それぞれ席を立った。

### column : XXLのTシャツとパンツ

「日々の悲喜こもごも思いもよらぬことを、個人情報に留まらせることなく、誰もがもしかしたら自分の物語だと思えるような、そういう語り口はないものか…」という問いと共に9月からやどかりハウスのInstagramを始めた。毎日のように駆け込んでくる人々がその背中やお腹に抱えているものは、わたしのお腹や背中のことであり、あなたのお腹や背中のことでもある。SNSで言葉にすることで、少しずつ、経験や感触が混ざり合って、その肌と肌の境目が溶けていきそうな予兆を感じる。

先日、仕事仲間のグループLINEで衣類の寄付を募ったら、ビッグサイズのTシャツと女性用のパンツを持参してくれた人がいた。明日その人が着ていたかもしれないものを、着の身着のままにいる人にすぐに渡しに行った。ふと、対面せずともすでに出会っているかのような錯覚が、Tシャツやパンツの持ち主には生まれているかもしれないと思った。まだ会ったことがないけれど、知らない誰かではなく、いつかどこかのわたし。あなたは、わたしは、今、どうしているだろうか。そんなまなざしで日々の投稿を読んでもらえたらと祈る。



やどかりハウス  
Instagram  
日々更新中!

秋山紅葉

ソーシャルワーカー/やどかりハウス相談員  
生きづらさの自助グループや上田映劇オープンダイアログを企画・運営。思考多動で雑談と暇が苦手。  
一人で居るのが好きでも対話したい 矛盾だらけの身体性に振りまわされて生きている。

## column: 泥沼に咲く

深夜 0 時。軽自動車を運転しながら帰宅する 30 分間。右手にハンドル、左ひじをひじ掛けに置いて掌で顔を支えている。斜めに下がった顔から車道は半分しか見えていない。車はよろよろと中央分離帯をはみ出る。

「社会」が求めてくる人間になることが嫌で、自分の生きる場所を探して歩いていたら、苦しんでいる人達と出会うことが日常になった。助けたいのではない。仲間として生きたい。そう思ってきた。しかしそれは容易な道ではない。人々が受けてきた傷の深さに、その壁に、私自身も無傷ではられない。ふと自身の命を投げ出したくなる。こういう生活はもう辞めようと何度も思い、それでも辞められない。それは正義感やら使命感やらとも違う。私の内面で日々起こっている事はむしろそれとは程遠い。自分だって耐えてきたのだからと苦勞を強いたり、これだけやったのだからと対価を求めたり、浅ましい計算があったりする。否定してきた社会の理論を自分こそが身体化している矛盾。その混濁した「身体」を持つ自分をもみくちやにしながら、泥沼をおろおろと歩く私は、しかしその苦しみの中にしか、私にとっての希望がないことを知っている。

やどかりハウスは 3 年目を迎えようとしている。宿泊数は 1400 泊を超え 200 名以上の人達と関わりが生まれた。その多くは「家庭」や「個人」の中に苦しみを抱え込んできた人達だった。それらは社会構造によってもたらされた苦しみであるにも関わら

ず「私的領域」という名目の中に巧妙に隠され、切り捨てられ、人々は孤立を余儀なくされていた。私たちはそのような苦しみに触れる中で、いつしかどんな内容であれ泊まりたい人であれば誰でも受け入れるようになっていった。それは善意からではない。むしろ怒りに依拠している。暴走する資本主義社会の中で、公共性や合理性、社会性などという言葉によって切り捨てられてきた人々の「生」が、その無残な排除の歴史が、私たちの目前に毎日のように立ち現れている。制度や法律が人々の為にあるのではなく、それがあることによる弱者の排除はもはや日常である。

私たちはこれから何ができるのか今の時点で知っているわけではない。政治に働きかけるのか、コミュニティを広げるのか、暴動を起こすのか。いつも先のことは分からない。今はただこの場所に辿り着く人達と日々悩み苦しみ悶えながらも、その暗闇の中にこそ私たちの「生」を掴み直したいと思っている。光は外にあるのではない。私たちの中にこそある。繋がりを奪われ、言葉を奪われ、自由を奪われた人々との「連帯」こそが、私たちの目的であり、闘いである。そしてそれはとりもなおさず、私自身の生き直しであり、残された希望でもある。

元島生

NPO 法人場作りネット副理事長。疲れやすい多動。内向的アウトドア派。歌うたい。法人として年間 10,000 件の困り事と出会う。そこで見えることを「場（社会変革のプロセス）」に変換することを仕事にしている。自己病名は支配拒絶型多動性疲労症候群。

絶賛  
募集中!あなたの「のきスポット」  
「のきパーソン」エピソード

やどかりハウスでは、あなたの「のきスポット」「のきパーソン」についてのエピソードを募集しています。

のきスポットとは、あなたが助かると感じる場所。

のきパーソンとは、あなたがホッとする人。

この街であなたの心がホッとする場所や人について教えてください。

お寄せいただいたエピソードは、やどかりハウス公式 note に掲載させていただきます。明確な誤字脱字などはこちらで手を入れさせていただきます場合がありますこと、ご理解ください。また「のきスポット」「のきパーソン」としてお名前があがった場所、人に関しては必ず確認を取ってから note に掲載いたします。みなさんの「のきスポット」「のきパーソン」にまつわる想いやお話をぜひお聞かせください。



こちらのフォームから  
ご記入いただけます!

ご寄付  
大募集!

街を社会的インフラにする。  
助かる文化を作る。  
今、この瞬間に、すでに社会を変える。  
私たちの力を取り戻すための出会い直しを、今。

寄付サイト↓

note  
公開中やどかりハウスとは  
街に生まれた雨風しのぐ宿

やどかりハウスのことについての基本情報から活用方法についてまで、わかりやすく解説してあります。やどかりハウスを使いたい or 気になる or 紹介したい! という方はぜひこちらのリンクを覗いてみてください。

- やどかりハウスとは?
- やどかりハウスを利用する  
食事について / アメニティについて / 過ごし方について
- やどかりハウスに相談する
- やどかりハウスと街  
のきした / のきした仕事事業 / のきしたシネマクラブ

noteはこちらから↓



## 『夜明けに、月の手触りを』から、展を終えて

2023年10月13日～15日に開かれた「『夜明けに、月の手触りを』から、展」。松本市で暮らす演劇家・藤原佳奈さんがこのプロジェクトの企画者だ。2013年の彼女が書いた戯曲『夜明けに、月の手触りを』を上演したいと、三才山峠を越えて相談を持ち込んだ5月末。犀の角を「劇場」として捉えれば「演劇」を上演することは可能であるもの、これまでそれらの捉え直しをしてきたこの場や人と一緒に何かを作るなら、普通に上演するというのではない何かを模索するのはどうか？自他ともに住職として振る舞う犀の角の荒井からの投げかけはちょっと禅問答的だ。

この投げかけから生まれた手探りの創作。形になりきらないまま、でも確かにある戯曲を手にした彼女がいよいよ動き出したのは7月。それはカフェが開く16時～閉店まで犀の角の片隅に戯曲と共に彼女が“いる”というシンプルなものだった。開いてみるとその場に訪れる人たちは、いわゆる演劇人だけでなく、言葉、時間、場、作家という人、ジェンダー観に興味がある人びと。演出家でも俳優でもない年齢も性別もバラバラな人達が一つの戯曲を手にし、そこにある言葉を発話し、さらに戯曲を触媒にした自らの言葉が交わされた。その動きは東京や松本、時にはオンラインにも広がっていった。戯曲と彼女が“いる”こと、そこに訪れた人びととの出会いの中で生まれたのは、戯曲には書かれていない2023年を生きている誰かが話したり書いたりした言葉たちだ。

一区切りとして迎えた10月13日からの3日間。そこでは形状も色もバラバラな紙にそれぞれの佇まいで印字された言葉たちをバイキング形式で来場者が自分で選び、ZINEにして持ち帰ることもできる展示空間、舞台経験の有無を問わない有志の参加者たちと藤原さんが構成した言葉を発話する形で立体化されたものの上演イベント、来場者と車座になって言葉を交わすクロストークの場、この3つで構成された。

世の中の戯曲が存在する背景には、劇作家が重ねてきた膨大な時間と苦悩と閃きがあると思う。そんな戯曲が社会に発信される主な手段として、劇作家自身あるいは演出家や俳優や舞台スタッフという極めて限られた人たちによって稽古という時間を重ね立体化され（上演）されることが当たり前になっていた。しかし今回は敢えて隔てを外し、一人の女性が10年前に書いた言葉たちに出会った誰かが話す自らの言葉。それらで紡がれた作品のようなものが、捉え直しという旅が続いている犀の角に新たな行き先を導いてくれた気がしている。

## 伊藤茶色

上田市丸子町出身1992年生。2013年劇団モカイコZ立ち上げ。2017年より犀の角に参加。舞台照明、制作スタッフ。うえだイロイロ楽部コーディネーター。障害をもつメンバーと表現活動をするリベルテのスタッフも。のきしたの活動を通じて演劇を再認識する中、自宅を地域にひらく住み開き計画も思案中。現在産休中、間もなく母になる。（追記：編集中に茶色ちゃんは母になりました！）



## 寄稿：犀の角から始まった一歩

命が大事、存在が大事、あなたが大事。言葉では言えても、それを体現するのは並大抵のことじゃない。犀の角や、そこに集う人達は、その並大抵のことではないことに闘い続けているように見える。

コロナ以降、それまでと同じように上演芸術に触れることが難しくなった。それまでは、ただ湧き上がる欲求に任せて創作をしていたのだと思う。でも、気づけば日々、医療や福祉、教育の現場から切実な痛みの叫びが聞こえてくる。上演芸術は社会の中で生まれる痛みをテーマに掲げることが多いが、守られた場所で、誰かの切実さを作品の素材として消費していないか、と立ち止まった。現実の痛みに向き合う覚悟はわたしにあったのか。上演芸術には、劇場には、わたしたちが共に生きていくために重要なはたらきがあるはずなのに、だから続けてきたのに、ぬるい、ぬるすぎる。これが劇場のはたらきとしての核心だ、と腑に落ちる場所から始め直さなくては、もう無理だ、という気持ちになった。ただ、どの土を踏めば歩み直せるかは分からないまま、考え続けて過ごしたのがこの数年だった。

『夜明けに、月の手触りを』から、展は、そんな数年を経て、ようやくこの土を踏みしめるぞ、と歩み直した一歩目の企画だ。東京で暮らす20代後半の女性5人を描いた戯曲（演劇の台本）『夜明けに、月



の手触りを』を書いたのは2013年、26歳の時。2017年に#Me tooもあり、この10年で社会は大きく変化したように思う。10年前のフィクションに触媒にしながら、集った人たちそれぞれの声を聴き合う場となった。人と人が出会い、言葉が交わされる、そのシンプルなできごとから発酵されていく場の豊かさを目の当たりにしながら、やはり、と思った。空間には意志が宿るのだ。犀の角が地域で人と交わり体現しながら積み重ねてきたその意志が、場の発酵を促していたことは、明らかだったから。犀の角と共鳴した地点から、わたしは一歩、歩み直すことができた。ここから、また、一歩、一歩、やっといこう。言葉以上に体現することを挑みながら。



## 藤原佳奈

演劇家。身体と言葉の結び目を手掛かりに、わたしたちのはたらきを見つめ、場をひらく。能楽堂や、取り壊し直前のアパート、居ぬきスナックなど、様々な場所で「劇場」の機能を思考し、実践を重ねてきた。2023年現在、松本市に居住。

## 路地の開き 2023 『リベルテと世界が出会う街歩き』 レポート

2023年10月29日に『リベルテと世界が出会う街歩き』を開催しました。メンバーや街の人から「上田」にまつわる記憶や思い出を集め、マッピングし歩くルートをとりました。マッピングはリベルテのメンバーの参加が多かったため、自然と「リベルテのメンバーの視点」から街を見直す、歩き直すものになりました。打ち合わせで🍷を握って食べようと盛り上がり、農家の佐納良裕さんの田んぼで、リベルテと犀の角の荒井家の皆さん、制作チームの茶色さん、石坂さんも加わった田植えや稲刈りを、ワークショップとして開催。稲刈りは、舞台美術に使ってもらった縁で交流した Co. 山田うんダンスチームも合流となり、賑やかな稲刈り🌾となりました。「街歩き」と「米作り」の2本のワークショップを行き来しながら、リベルテのメンバーとノが人と出会うこと、同じ時間や視点をすることで、自分の知らない世界とつながり結び直すことをリベルテに取り入れようとしているのかもしれない、そんなことを僕は考えました。

当日は3つの街歩きルートと、みんなで食べる「🍷」を握るチームに分かれました。会場となった犀の角では、写真アーカイブマップの展示や黒板に即興でキャプションを書き入れ、インスタレーション展示にもなりました。出発前、メンバーのAIKAさんのポエトリーディング『街歩き』で「世界」と「街歩き」と「出会い」という言葉が何度も繰り返し出てきました。街歩きファシリテーターであるメンバーによる諸注意のアナウンスで出発。4つのコースごとに制作した纏（まとい）を目印に、どこへむかい、どうなるかの、と歩き探りながらメンバーによって導かれる街歩きでした。会場へ戻り一人ひとり街から持ち帰ったものと🍷を噛み締めました。その🍷の🌾はリベルテのメンバーや犀の角の人たちと田植えし稲刈りし、当日の参加者とメンバーが握ったもの。一人ひとりの記憶から二人、三人なって当日は組になった人と歩き、その後、それぞれにバラバラになって帰る。そんな1日となったイベントでした。🌱



写真上：藤澤智徳 / 写真中・下：村上圭一 / イラスト：HARU (NPO 法人リベルテ)

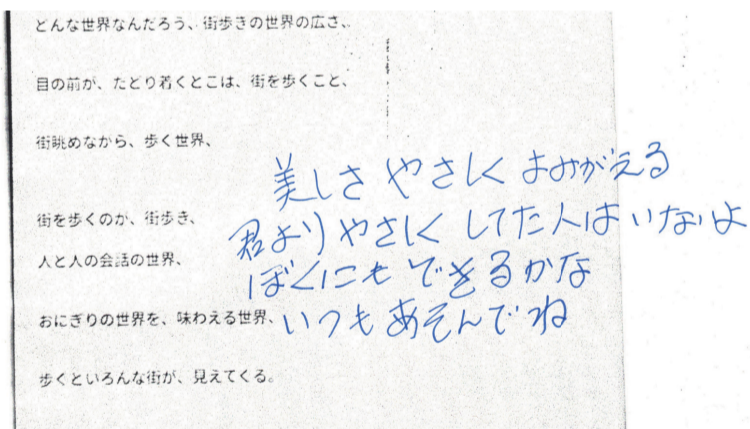
### 武捨和貴

1982年生まれ。長野県上田市出身。NPOの名を「リベルテ」とうっかり名付けてしまったばかりに、そこに集う人によって自由という矛盾を苗床にした多様なピオトープが形成され、自らも棲息する。NPO 法人リベルテ代表理事。2021年から「路地の開き」という福祉施設と地域の境界線を曖昧にしていくプロジェクトを継続中。妻、子2人と猫と暮らしている。

### 「詩」 倉金伸光

美しきやさしくよみがえる  
君よりやさしくしてた人はいないよ  
ぼくにもできるかな  
いつもあそんでね

くらがね・のぶみつ / 1965年生まれ。リベルテのメンバーで、アトリエ路地のご近所さん。タバコと野球、そしてプロレスやボクシングのようにムキムキマッチョがぶつかり合うスポーツが好き。子どもも好き。頼まれたら絵をどこにでも描く。ザワメキアート2019に入選。



## 『路地の開き 23-24 アーカイブス展』

会場：ton - 屯 - (上田中央3丁目3-10)

会期：にーろく市 ver. 2023年12月2日土&3日日

🍷と🍷 ver. 2023年12月9日土~2024年1月13日土

時間：10:00~16:00 (定休日：月・日曜日、12月29日金~1月3日水)

### 関連イベント

●12月2日土・3日日にーろく市会期中

佐納さんのお米でにぎる🍷&ただいま! エスニックとん汁

●2日間の限定販売 [30食] 売り切れ次第終了🙇

●会期中

「えんぎもん」を寄せ集めた「お正月飾り」も数量限定販売します!

その他情報はリベルテ SNS 見てね

●2024年1月13日土 13:00~16:00

●旅するポテサラ屋ポテミリー「いもフライ屋」🍷

じゃがいもの無限大の可能性を世に知らしめるべく、旅先で仕入れた芋知識をもとに「#365日のポテトサラダ」レシピを開発し、日めくりカレンダーの発行を夢見る「旅するポテサラ屋 POTEMILY」。リベルテの「いもフライTシャツ」も自身のサイトやイベントで販売してもらっています。今回はポテトサラダではなく、栃木県佐野市に伝わるB級グルメ「いもフライ屋」を出店。もちろん、マリコさんも登場!?





芸術家的批判

UEDA  
CINEMA  
FORUM  
2023

会場：上田映劇 & トラウム・ライゼ

人は肩書や集団の属性ではなく、固有の人格を持った人として扱われるべきで、そうした自由な個人が自律的に社会をつくっていくことが理想だと述べた「芸術家的批判」をテーマに据え、上田映劇では3日間の映画祭を開催しました。100年前に起きた関東大震災時の虐殺事件を描いた『福田村事件』（監督・森達也）を皮切りに、その時代を生きたアナキズムの大杉栄や伊藤野枝、金子文子と朴烈がスクリーンに登場しました。また現代も続く虐殺として『ガザ 素顔の日常』の緊急上映もあり、上映後にはパレスチナから農業支援を行うNGO代表のフアッドさんがオンラインで登壇。いまこの瞬間も続く虐殺や民族浄化の現状を話してくださいました。映画だからできることがある。映画を私たちの対話の真ん中に置きながら、あらゆる人と意見を交わしていきたいと思っています。

寄稿：パレスチナに寄せて

数々の戦争を教訓としながら、誰もが人としての尊厳を守られる平和な世界へと、国際社会は確実に歩みを進めているのだと僕は思って生きてきた。しかし、イスラエルの自衛と称して始まったガザへの想像を絶するジェノサイドと、それを黙認しながらも止められない世界の姿は、帝国主義が蔓延った時代とさして変わらない無法の僻地を国際社会が未だにウロウロしていることを僕に思い知らせた。

それを機に、パレスチナとユダヤの歴史や、アパルトヘイトと呼んでも過言ではないイスラエルによるパレスチナの占領や封鎖の実態を改めて紐解き、無知によって過酷な抑圧を見過ごしてきたことを今は恥じている。

とは言え、現在進行している惨劇は歴史的に根深く途方もない規模で、日本に暮らす一市民の私たちには安易に手を出せないものに見えてしまう。

だが、あまりに非情と思えるイスラエルの姿は、関東大震災直後に誤った情報や偏見によって恐怖を煽られ、集団として自衛のつもりで朝鮮人虐殺へと暴走してしまった日本の民衆の姿と、前提が全く違うとは言え何処か重なって見えないだろうか？

或いは、国際社会で強い影響力を持つイスラエルのパレスチナに対する明らかな国際法違反の数々を黙認し続けてきた国々の姿は、長年にわたって有力な芸能プロダクション社長が多数の所属タレントに対して性加害を重ねてきた実態を黙認し続けた芸能界やマスコミの姿と似ていないだろうか？



パレスチナから Fuad Abu Saif さんに登壇いただく（逐次通訳：野川未央）

何らかの条件が揃えばこういった残忍さや冷酷さに陥ってしまう人間の危うさは、誰の中にも眠っているのだと僕には思える。そうやって、立ちただかる巨大な問題を手元に手繰り寄せてみることで、私たちにも手が届く解決への糸口が少しは見えてくるのではないかな。

今パレスチナや世界中で起こっている惨事の本質は宗教や、人種や、右派と左派の間の争いではない。過去にない速さで変化する世界において覇権争いの嵐に晒され、ヒューマニティー（人間性）をかなぐり捨てることまでも禁じえない窮地に立たされた私たち人類が、それぞれの胸の中心に再び人間性を取り戻そうと抗う闘いのだ。

その闘いにおいて私たちは嵐に削り取られ傷ついた自分自身の人間性の手当てをし再生させることから始めなければならない。それこそが身の回りの友人家族や属するコミュニティや国家のヒューマニティーを蘇らせ、人としての尊厳や矜持を誰もが獲得する世界へとつながっていくのだ。

山崎タヲル

兵庫県神戸市育ち。5年間住んだ沖縄から縁あって上田市別所温泉に移り住んで2年半。冬の寒さにも少し慣れてきました。イベント出店の古本屋「石コロぶるー」を9月から細々と始めました。

ついに最終章！

まちとつながるプロジェクト 犀の角 × 百景社 藤村プロジェクト 2021-23

Before the Dawn 第二部 ～島崎藤村「夜明け前」を巡る旅～

様々な困難を抱える現代社会から「夜明け前」を巡る旅に出る。私たちは、青山半蔵の背中に何を見るのか。

コロナウイルスが世界を覆い、これまでにない時代の変化が起きた頃、私たちは島崎藤村の小説「夜明け前」に出会う。日本が近代化へと急速に歩みを進めるなか、山深い木曾路で廃れゆく宿場の当主として奮闘するひとりの男、青山半蔵。彼は国学に新しい時代の夢をみながらも、次第に世間から排除されていく。その背中を追う長い旅を続けながら、私たちもまた困難が山積するコロナ後の世に生きていることに気が付く。揺れ動く歴史のなかに埋もれていく彼の姿の内に、私たちは何を見るのか。



日程：2024年2月2日（金）14：00開演（13：30開場）  
3日（土）14：00開演（13：30開場）  
4日（日）11：00開演（10：30開場）  
料金（全席自由・税込）：一般 3,000円 U-25（25歳以下）1,500円

脚本：志賀亮史（百景社）、藤村プロジェクト  
構成・演出：志賀亮史（百景社）  
出演：二〇大学、山本晃子（百景社）、快樂亭狂志、山崎到子、永峯克将、小林風生子（anemone / TOKYOハンバーグ）ほか

チケット&問い合わせ：一般社団法人シアター & アーツうだ TEL：0268-71-5221 Mail：info@sainotsuno.org

学校行きづらい日は映画館へ行こう！

うえだ子どもシネマクラブ



学校に行きにくい・行くのをやめてしまったこともたちのもうひとつの居場所として映画館を活用する取り組みです。学校でもお家でも塾でもない、「映画館」という場所で、映画を観ながら語り合える機会を作ります。

お気軽にご登録ください！



↑登録フォーム



↑上映作品など

編集後記

「のきたジャーナル」を毎回泣きながら編集している。それは期限内に合わない！という「泣き」でもあるけれど、いや、全くそんなことは別の理由で、毎回メッセージャーからガンガン送られてくる、生身の言葉をシャワーのように浴びているうちに、身体が耐えられなくなる瞬間があるのだ。ああ、この言葉をどう置こうか。紙面に他に何も置きたくなるような、この力強い言葉たちを、社会にどう届けられるのか。きっと多分、みんなが生き様を見せてくれているように、私も何も考えずに、飾らずに、直球で載せていけば良いのだ。でもどうしても飾ってしまう。毎回、載せられない言葉もある。文字には起こしきれない「空気」や「感情」がまだまだある。私やみんなが目にしてる光景を、もっと世の中に出していきたい。そんな思いが募って止まらなくなる。

上段でも紹介したとおり、先日「UEDA CINEMA FORUM」という映画祭を開催した。「芸術家的批判」という言葉を置きつつも、個人的にハマりしている「アナキズム」が私の中ではメインテーマとなっていた。一連の上映とトークを終え、私なりにエッセンスを抽出すると「自由な個人が社会を変える」とか「内から湧き出る欲望を信じて進め」とか「ひとりひとりにこそ力がある」というアナキズムの言葉がいくつも出てくる。アナキズムとのきたははとてに近いところにあるということも確信した。みんなで助かり合う社会を自分たちで作っていくというだけだ。だからそれを耕す場として自由な表現の場が必要なのだ。そんなテンションでこの3号を発行しています。またいろいろご意見ご感想をお寄せいただけたら幸いです。（なおいめぐみ）

のきた journal



発行：のきた（NPO法人場作りネット） 編集・デザイン：直井恵  
発行部数：4000部 発行日：2023.11.30  
助成：本事業は、（一財）中部圏地域創造ファンドの「新型コロナウイルス対応緊急支援事業2021」として休眠預金を活用した助成を受けて実施しています。

